

原發

「神話」が揺らぐとき

神話は人間がこの世に登場して以来、文明の程度や深度に拘らず、口伝や壁絵、さらに記号化（文字化）こんにちして今日世界各地に残されている。神話が果たした役割は、一般には来世への復活、豊かに実る農作物や獲物の収穫への祈り、自然への素朴な畏敬、あるいは、為政者の権力の保持などを祈願したものと考えられているが、幾つかの複合的なものも多く実態は明確ではない。

神話には擬人が登場し現実味があって面白い。また、それなりに教訓も含まれているので今日まで語り継がれて来たのだろう。しかし、神話の中にはそれだけでは説明のつかないものもある。ギリシヤ神話の中の「ゼウス」は正邪両面の顔を持ち、強大な神通力を持った存在として描かれている。わが国の「古事記」では国生みの神代かみよ七代の後半に登場する天照大御神の弟須佐之男命にこれまた、無法と人助け両面の仮面を付けさせ主要な役割を演じさせている。両者は神であると同時に人間的で、優しくも荒ぶる存在として描かれている点で共通している。少々役割は違うものの、あの慈悲深い釈尊さえ恐ろしい形相の四天王を従えている。自然界の諸現象の説明には超能力を持った「神」がどうしても必要だったからかも知れない。

いと考えてしまう。古人はギリシャ人ならずとも、この世には善人と同数の悪人が居ることを前提とするか、あるいは善悪さえ意識しない者が大多数として構成されていたとしか思えない。

人間の考えた神には自然の摂理を動かす権限は与えられてはいない。ところが「ゼウス」はあるとき最高神によって禁じられていた危険なパンドラの箱の蓋を、開けてしまったのである。この行為は科学者が好奇心に飲み込まれ、この世には存在しない原子核を生み出し、人類への貢献ではなく兵器として利用しようと考えたのと同じでいなくもない。

かつては、ダイナマイトを発明したノーベルの産物が能率と産業の発展を飛躍的に進展させた功績は評価できても、兵器に転用した結果、戦争を一層悲惨なものにしたことは否めない。しかも、その是非は問われることなく現在では世界で最も権威ある「ノーベル賞」になっている事実を考え併せればゼウスだけを恨み責める訳にはいかないだろう。しかもこのパンドラの怪物を、被爆国では、決して手に行うことはないだろうと思われていたが、国に資源が少ないことを理由に、平和利用という美言にすり替えられ、原子力発電の燃料として国家が導入を奨励したのである。

一度。パンドラを飛び出した姿なき悪魔は、昭和五十六年米国スリーマイル島、七年後の昭和六十一年旧ソ連のチェルノブイリで、人間界に鋭い警告を発した。それにも拘わらず、この美しいみどりの島が抵抗もなく経済成長という時流に流されていくのを眺めて、パンドラの魔手は平成二十三年三月十一日、東京電力福島第一原発に三本目の魔矢を放ったのである。これは巨大地震が引き起こしたものとされているが、神話流に解釈すれば地震は地下の大ナマズがくしゃみをしたということになる。しかし、これを想定外とするのは、科学者ならずとも言語学的立場からも許されはしない。想定外は想定という基幹語によって成り立っているからである。

ギリシャから見る天界は、人間界と同じように嫉妬と怨恨と復讐に満ち、多様な動物や架空の生き物まで登場させ人々は複雑な物語を構成した。その悲劇話は今日にまで残っている。これに対してわが国では、夜空は月を中心に眺めており、古来から、月にまつわる伝説は山ほどある。星を語った「枕草子」の「昴」は例外とも云えるものである。ウサギが餅つきをしていると云われる月には、語り物として「竹取物語」があり、呼び名にも十三夜、望月、十六夜月、立待月、居待月、寝待月、二十三夜、後の月、芋名月、豆名月、

粟名月、無双月など等の異名があり、このことから、農耕民族の特徴と共に、^{のどか}長閑で穏やかな日々の生活が遠く偲ばれる。考えてみるに、年月は移り、時代は変わっても人々の暮らしの安寧と幸せの真価は、物質的豊かさでは量れないものなのかも知れない。真夜中の白昼夜やテレビ・ラジオの二十四時間放送、コンビニの終夜営業は人間本来のリズムとは乖離^{かいり}していると正常な人間は考える。神は人間を昼働き夜寝るように創ったのである。

原発の「安全神話」が根底から崩れた今、人々は「ゼウス神の怖さ」よりも「見えず匂わずの脅威」の方が怖いものだということが知った。現代では月を眺めて和歌をつくり、風雅を楽しむことは少なくなりましたが、日本人としての美意識まで失ってはならないと思う。今回の地震、津波、原発事故で驚いたことは数限り無いほどあるが、最も嬉しくも安心できたことは、日本中が結束して夏場の電力を二十五パーセント減量出来たことである。各企業の協力を始め、一人の自覚ある行動が成し遂げた金字塔といってもいいだろう。かつてわが国は外国から「日本株式会社」と悪口を云われた時代があったが、私は今、この事故を機に「世界で最も心の美しい国」と外国から云われる神話を創りたいと願わずにはいられない。